

## 流行研究会と塚原洪柿園

—〈江戸趣味〉の中の身ぶり—

瀬崎圭 一一

はじめに

ある時期まではそれなりに評価されていたものの、現在はほとんど顧みられることはなく、日本近代文学研究の対象にもならない作家は数多くいる。とりわけ明治期に活動していた文人たちは、いわゆる文学史の記述においてその〈近代性〉を評価され、人物名、作品名を強く刻み込まれている者を除いては、そのような状態を招きやすい。言うまでもなく、明治期の文学状況は近世期のそれとの連続性のある程度有しているが、〈近代文学〉及び、その批評や研究における評価軸から外れる人物やその作品は、近世文学研究側からは明治期の文人や作品であるという理由で、近代文学研究側からは〈前近代的〉であるという理由で、黙殺に近い状態に置かれることになる。それぞれの時代に分節化されて細分化を極めている文学研究の現状や、文学研究そのものが衰退しつつある昨今の状況、さら

には現在の近代文学研究のディシプリンそのものが、とりあえずはその原因として考えられよう。本稿で取り上げる塚原洪柿園も、そうした状態に置かれている作家の一人だ。

塚原洪柿園は、本名靖<sup>しずむ</sup>、洪柿園の他に蓼洲などの筆名を用いた。洪柿園という雅号は、自宅にあった洪柿の樹の悟りきった様子から採ったという<sup>1</sup>。塚原家は代々徳川幕府に仕えており、嘉永元〔一八四八〕年の洪柿園出生当時、父の市之丞昌之は二百三十俵取、根来百人組の与力であった。結果、洪柿園の少年、青年期は幕末維新の混乱の中にあり、旧幕府側の脱走兵として官軍と戦った経験もあるという。明治元年、徳川家が駿河府中城主として新政府から七十万石を与えられたのを機に、塚原家も一家を挙げて静岡に移住し、洪柿園は静岡藩士として駿州田中城の勤番となった。翌年、洪柿園は沼津の兵学校に入学して外国語の知識を習得、その後、静岡の医学校に身を置いたり、藩命で薩摩に遊学したりもしている。明

治七年に沼津兵学校時代の友人島田三郎（沼南）の経営する横浜毎日新聞社に入社し、明治一一年に東京日日新聞社に移って、社長福地源一郎（桜痴）と共に編集に従事した後、明治二〇年代半ばから同紙上に多くの歴史小説を発表した。<sup>2)</sup>

明治四〇年から四三年にかけては、左久良書房から全一二巻一四冊の『渋柿叢書』が、明治四五年には春陽堂から『渋柿集』上下巻も刊行されており、この時期には既に歴史小説の大家として位置づけられていたと言ってよく、相撲の番付に擬せられた「蒙御免日本文士階級鑑」（『文芸新聞』明治四〇年三月一日）での渋柿園の位置は、大小説家の前頭五枚目の位置にある。明治四〇年六月には、時の首相西園寺公望による文人との歓談会（雨声会）に、明治四二年一月には、文部大臣小松原英太郎による文士懇話会に招かれもした。ちなみに第一回の雨声会に招待されたのは、森鷗外、坪内逍遙、幸田露伴、巖谷小波、塚原渋柿園、内田魯庵、広津柳浪、川上眉山、夏目漱石、二葉亭四迷、大町桂月、後藤宙外、島崎藤村、泉鏡花、小栗風葉、国木田独步、徳田秋声、田山花袋、柳川春葉、小杉天外の二〇名で、逍遙、二葉亭、漱石は出席しなかったという。小松原文相の文士懇話会は、明治四四年五月の文芸委員会設立へとつながるものであるが、その委員は、森鷗外、上田万年、芳賀矢一、藤代素人、上田敏、徳富蘇峰、姉崎嘲風、佐々醒雪、幸田露伴、巖谷小波、伊原青々園、大町桂月、塚原渋柿園、饗庭篁村、足立北鷗、島

村抱月が務め、やはり渋柿園が選ばれている。<sup>3)</sup>

渋柿園は大正六年に没するが、大正末期から昭和初期の円本ブームの折には、小説「由井正雪」が『現代日本文学全集 第三十四篇』改造社、昭和三年）に、同じく「島左近」「山中源左衛門」「最上川」が『明治・大正文学全集 第十四巻』春陽堂、昭和五年）に収録され、戦後も「天草一揆」が『大衆文学大系 3』（講談社、昭和四六年）に、「山崎合戦」「俠足袋」が『明治文学全集 89』（筑摩書房、昭和五一年）に収録された。その後、『渋柿叢書』などが復刻されたことはあるが、現在はほとんど顧みられることはなく、一九八〇年代以後の渋柿園の研究も、管見の限りでは、三瓶達司による作品読解や<sup>4)</sup> 菊池真一による書誌の整理<sup>5)</sup>などが見られる程度である。

ただし、本稿は、こうした渋柿園の文学を分析するものではないし、その作品や作家活動を再評価しようとするものでもない。既に、神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』（勁草書房、平成六年）などの研究が明らかにしているように、明治末期からの渋柿園は、デパートメントストア化を進める三越呉服店の流行研究会（流行会）や、流行会から派生した江戸趣味研究会の一員としても活動していた。本稿は、しばしば研究会という単位で捉えられることの多いその動向を<sup>6)</sup> 渋柿園という一人の人物に焦点を当てて捉え直す試みである。雨声会や文芸委員会、流行会、江戸趣味研究会などの組織と渋柿園との関係の内実、流行会における渋柿園の動向

の整理、明治末期から大正初期の時代状況と渋柿園の位置などを明らかにすることなどが、本稿の主要な目的である。

## 一、旧幕臣としての渋柿園

前述したように、渋柿園は、島田沼南が経営する横浜毎日新聞社に入社したのち、福地桜痴が社長兼主筆を務める東京日日新聞社に移っている。山本武利が指摘しているように、明治初期の新聞記者には旧幕臣が多く、渋柿園、沼南、桜痴も幕臣の家に生まれ、自ら幕府に仕えたりした経歴の持ち主であるという点において共通している。特に、桜痴と渋柿園の関係は深く、渋柿園は桜痴に対する敬意の表明を度々繰り返した。<sup>5)</sup> 旧幕臣という渋柿園の出自は、以後の渋柿園の創作活動や言論活動の中に強く反映されていくことになる。

渋柿園が『東京日日』誌上に歴史小説「浄瑠璃坂」を連載し始めたのは明治二五年六月のことであるが、歴史小説への志向は武家に生まれた渋柿園の内部から生じたものであると同時に、その当時の状況が生んだものでもあったようだ。明治二〇年代には、欧化主義への反動から国粹主義的な思潮が生まれ、そのような動きを基盤として近代史学が成立しただけでなく、小羊子（坪内逍遙）・西蹊生（金子筑水）「明治廿六年文学界の風潮」（『早稲田文学』明治二七年一月）が「歴史研究の流行せし事は、一昨年の後半期より、

昨年へかけて一の著き事実なり、殊に一昨年の終と昨年の始とは、此の熱（此の流行）の最も昂上せし時期なりき」と指摘するような状況が生じていた。こうした「歴史研究の流行」といった状況と、自らの出自とが絡み合っており、渋柿園は『東京日日』に歴史小説を掲載するようになったと言えよう。そして、その五年後には早くも次のような評価が現れている。

浪六の奇気ありて而かも其杜撰なく、露伴の飄逸無けれども而かも其風骨を有す。歴史小説家として今の時塚原渋柿園に頡頏し得るもの果して幾人かある。／＼もし彼をして脚色の代りに性格を重ぜしめ、其風稜鉄の如き所に一脈の情緒を点せしめば、彼の作豈伊達政宗、北条早雲、もしくは島左近に止らむや。／＼彼の筆能く鉄衣悍馬を描き、又た能く汗血俠勇を写す。而して性格の微に入りて事件と人物との内外受発の理路を示さず。彼の露伴に如かざる所以なり。若し夫れ時代の精神を解して入魂点睛するの技倆は当代恐くは彼に前なし。吾人は渋柿園が自ら省みて大に奮勵せむことを望む。（無署名「歴史小説家としての塚原渋柿園」『太陽』明治三〇年九月二〇日 傍線引用者）

「鉄衣悍馬」や「汗血俠勇」を描けるといふ評価は、渋柿園の歴史小説の特徴としてその後もしばしば繰り返されていくが、こうした捉え方にも旧幕臣という渋柿園の出自やそのイメージが関係していたのであろう。また、右の引用に見られるように、渋柿園は幸田

露伴や村上浪六らと比較されることが多く、村田犀川「談理の徒を排す」(『新声』明治四二年一月)でも、露伴と比較された上で「吾人は洪柿氏の諸作に於て、経世家的見識と詩人的同情の円融無礙なるを認む。氏の諸作に細観渉察の迹あるはそれ是由る歟」と、その記述の特徴が指摘されている。洪柿園は、武士や戦の描写といった点だけでなく、歴史小説を通じた時代精神の抽出や、その記述に見られる細かな観察といった点でも評価されていたようだ。

洪柿園自身は、自らの歴史小説について、「歴史なるものは真の事実であるか、どうかといふ事が先づ最初の疑問であつて、私の考では此の歴史なるものが原来一種の小説であらうとおもふ。だからこれが事実、これが事実といふよりは、寧ろ之れを一切作り物語と見てしまつて、其上に自分々々の考へを附けるより外にしかたがないと考へる。(中略)その時代々々の、風俗なり、習慣なり、人情なり、又その時代を代表する人物の性格なりを描写するが主なのだから、此の小説に冠するに歴史と云ふ文字を以てするは好ましくない。で私はいつも云ふこれは時代小説と呼びたいのだ」(『歴史と小説(歴史小説にあらず時代小説なり)』『新声』明治三九年一〇月)と述べており、歴史なるものの虚構性や、「時代小説」という呼称への拘泥を示している。また、「自己を重からしめ、祖先を知らしめ、国家を愛せしむる、又さうさせなければならぬ。自分は今までその考へで書いて来たのです」(『歴史小説に就て』『新小説』明治

四一年七月)とも語っており、国民思想を涵養する歴史小説の必要性を訴えている。これらを総合すれば、洪柿園は、「自己」と「祖先」との連続性を担保する「国家」の歴史を、虚構であるを知りつつも愛さなくてはならないという立場に立っていたことなるうが、「自己」と「祖先」の連続性の向こうに「国家」を見、そしてその歴史が虚構でもあることを認識しているところに、旧幕臣としての洪柿園の歴史観を垣間見ることもできよう。

前述した、明治四〇年六月の西園寺公望による文人との歓談会(雨声会)に洪柿園が招待されたのは、先に挙げたような歴史小説家としての評価の蓄積によるもので、明治四〇年六月一七日から一九日まで三日間行われたこの会の三日目、一九日午後五時から、洪柿園は、露伴、桂月、魯庵、独歩、藤村と共に会に出席した。当時の新聞記事「首相の文士招待(三日目の請待)」(『東京朝日新聞』明治四〇年六月二〇日)によれば、接待役の竹越三叉のもと、洪柿園は「日本小説は支那や西洋のものより品格に於て大に優つて居る」と気焰を吐き、娯楽の話題には自身の岩石収集の経験を披露しながら「総じて趣味なるものは凡て愚だ」と述べ、桂月が人相論の話をすれば、接待する芸妓相手に人相を見始めて会を盛り上げたという。洪柿園自身も、この日についての記事を残しており、西園寺公望の印象を「主人の侯爵の談話に巧に、諧謔に富み給へるは今更にて来客の臍を抉るに侮るべからざるの手腕がある」(『首相邸参候の記』

『大阪毎日新聞』同年同月同日」と記している。

渋柿園は、その後開催された第二回（明治四〇年一〇月一八日開催）、第三回（明治四一年五月二七日開催）、第四回（明治四二年六月一六日開催）、第五回（明治四三年一月二五日開催）と、兩声会に出席し続けた。明治四四年一月一七日開催の第六回は眼病のため欠席したが、ほぼ毎回出席していたことになる。ただし、この行動は必ずしも当時の渋柿園の発言と合致しているわけではない<sup>13</sup>。渋柿園は兩声会に出席し続けていた当時、「心細いといへば、今の日本は大変な借金をしてゐて、成算が立たんといつて、上御一人から下訳の分つた人間は心配してゐる、戦が初つて臥薪嘗胆するのじやない、今が其の時だのに、閑散の身になつたからといつて西園寺公望といふ男が、京都、下んだりまで行つて、芸者を近けて、酒を飲ますのが上手だなどと云て、馬鹿を尽してゐるが、沙汰の限りだね、新聞に風流宰相とか、風流何とかで馬鹿々々しい、怪しかることだ」（「渋柿園一夕話」『趣味』明治四一年一〇月）と述べてもいるからだ。前掲の新聞記事では、西園寺公望の談話の手腕を持ち上げていたが、この記事では、日露戦争後の青年たちの思想や日本の経済状況を憂いながら、兩声会を主催した首相西園寺公望を痛烈に批判している。

前述の通り、渋柿園は、明治四二年一月一九日の文部大臣小松原英太郎による文士懇話会にも出席し、その新聞記事でも「最も酩酊

せるは上田万年、塚原渋柿園の両家にして小波、抱月氏等も大分きこし召して居られし様子なり」と報じられていることから分かるように、会合や酒席そのものは好んでいたようだ。だが、それは必ずしもその会合や組織の趣旨に渋柿園が賛同していたことを表すものではないのだろう。渋柿園の発言には、旧幕臣という出自故の国家意識がしばしば顔をのぞかせているが、そうしたスタンスから生じる明治の社会や政治に対する批判的な態度が、この時期に彼が名を連ねていた組織や会合との関係にも表れているのである。そして、三越の流行会と渋柿園との関係にも兩声会のそれと同様の認識がうかがえる。

## 二、流行会と渋柿園

かねてから西洋のデパートメントストアの手法を取り入れていた合名会社三井呉服店は、明治三七年一二月に株式会社三越呉服店に改組され、三越は翌年年度の主要新聞各紙に「デパートメントストア宣言」の広告を掲載した。三越誕生直後に仕掛けられた元禄模様の流行は、日露戦争の戦勝景気と相俟って大きな広がりを示し、それに呼応する形で明治三八年七月に元禄研究会が立ち上げられた。<sup>14</sup>

明治三八年七月二三日、井上頼園、足立北嶋、島田沼南、岡野知十らの賛助と、戸川残花の主導によって第一回元禄研究会が開催され、残花の趣旨説明や、福地桜痴、角田竹冷、清水晴風、正木直彦、

鳥居龍蔵らの演説が行われた。<sup>16)</sup> 同年一月五日には引き続き第二回の研究会も行われている。この元禄研究会には多くの文人が参加しており、例えば第一回の研究会には、残花、桜痴、竹冷、内田魯庵、伊藤松宇、森無黄といった旧幕臣や秋声会のメンバーに加え、大島宝水、関如来、梶田半古、松居松葉らが名を連ねた。第二回の研究会には、彼らに加えて、島村抱月、塚越停春、鍋木清方、佐々醒雪、福田琴月、笹川臨風、五十嵐力、長谷川天溪、野口米次郎、塚原渋柿園、神谷鶴伴、幸堂得知、水野年方、三木竹二、石橋思案といった文人たちも見られるようになる。<sup>17)</sup> その後、元禄研究会は明治三九年二月四日に第三回研究会を催し、<sup>18)</sup> 同年六月一七日には早稲田の大隈重信邸で文芸協会との連合研究会を開いている。<sup>19)</sup> 大隈は第一回元禄研究会に出席しており、第二回会合に抱月や天溪の名があるのもそのためであろうが、この連合研究会の開催も、文芸協会の会頭である大隈の政治力によるものであろう。ちなみに、渋柿園はこの文芸協会の賛助員でもあり、同年二月一七日に行われた発会式にも出席している。<sup>20)</sup>

連合研究会開催以降の元禄研究会の行方については定かではないが、この会への三越の関与があったことは確かで、その機関雑誌『時好』誌上でも会の様子を紹介したり、展示品を出品したりしている。前述したように、三越では明治三八年六月に流行研究会（流行会）という組織も結成されており、<sup>21)</sup> 当時の文人、知識人から流行

形成についてアドバイスを求めた。<sup>22)</sup> 博文館から三越に入社し、機関雑誌『時好』の編集を任された浜田四郎は、衣服や調度品に詳しくという理由から各新聞の劇評記者に協力を得て記事を集め、そこから流行会が生まれたことを回想しているが、<sup>23)</sup> 初期のメンバーには、黒田撫泉、横山健堂、遅塚麗水、石橋思案、永井鳳仙、岡鬼太郎、伊坂梅雪、井上剣花坊、篠田鋳造、戸川残花、神谷鶴伴、松居松葉、水口薇陽、中内蝶二、武田桜桃、巖谷小波、伊原青々園、岡本綺堂、田村三治らの名が見える。確かに新聞の劇評担当者の名は多く、前述の元禄研究会にも参加していた人物たちの名もあるところを見ると、<sup>24)</sup> 二つの組織のつながりを考えることもできよう。

明治四二年頃からの流行会にはさらに多様な人材が集まり、文芸関連では、佐々醒雪、塚原渋柿園、半井桃水、東儀鉄笛、前田曙山、新渡戸稲造、森鷗外、井上通泰、饗庭暈村、内田魯庵らが加わった。大正元年一月には、幸田露伴、佐々醒雪、邨田丹陵、塚原渋柿園、中内蝶二、井上剣花坊、斎藤隆三、久保田米斎、饗庭暈村、伊原青々園をメンバーとする江戸趣味研究会が流行会から派生しており、会の主導による資料調査や講演会、展覧会が実施されている。流行会は、その後も柳田国男や笹川臨風らをメンバーに加え、活発な活動を行った。

渋柿園は、明治三八年一月五日開催の第二回元禄研究会に参加し、三越の流行会には明治四二年一月二日開催の例会から参加す

るようになった。流行会には兩声会と並行して出席していたことになる。元禄研究会や流行会への渋柿園のかかわりは、むろん江戸文化に対する知識の深さに起因するものであろうが、その場に名を連ねていた文人たちと通じていたからでもあろう。例えば、前述の通り、福地桜痴は渋柿園と深い関係にあるし、東京日日時代の岡本綺堂が師事したのは渋柿園であった。また、渋柿園は、三越の前身三井呉服店に協力的であった尾崎紅葉や、流行会で中心的な役割を果たした巖谷小波とも親しく、第一回元禄研究会で桜痴と共に演説を行った角田竹冷とも通じていた。<sup>26)</sup>

このような経緯から流行会に名を連ねるようになったと推測される渋柿園だが、流行会の例会に最初の出席を見せる数か月前には、「輸入が超過するといふが、新輸入の主なるものが、寶石だといふから驚くね、世の中が斯う虚栄心が強くなつて、奢侈に傾いては好かぬ、女などが奢侈になるのは、天賞堂だとか、三越とか白木屋とか、奢侈の風を煽ぎ立てるのだ」(「渋柿園一夕話」前掲)と述べており、三越に対して批判的であった。女性の虚栄心をあおる装置として三越を批判する言説は、当時の三越批判にしばしば見られる様式であり、<sup>(26)</sup> 渋柿園の言説もその反復に過ぎないが、そうした立場に立っていた渋柿園が数か月後に三越の流行会に参加していることには注意すべきだろう。

流行会参加後にも、渋柿園は「潮に随つて波を上げる」(塚原洪

柿園・鳩山春子・内藤鳴雪・泉鏡花・巖谷小波・成瀬仁蔵「文教と三越呉服店」『太陽』明治四二年四月一日)の中で、三越に対して以下のように発言している。

実はまだ私は三越の店附を覗いた事もない。(中略)勿論『流行』といふことを、経済といふ側の意味から言へば詰り『贅沢』で、更に風教上の堅実とか、克己とかいふ方から見れば、決して喜ぶべきこととは言へない。然しながらその『流行』を作る裏面、『流行』の世間に現はれた果には、また貴むべき努力や重んずべき効績が輝いて居る。(中略)昨日の流行は今日の旧物、今日の理想は明日の現実、斯くて社会は活動し、長足し、商工業の発達も促せば、文物の奨励ともなり、随つて科学は益々発達し、伎芸は彌々上進するといふ、因は果を為し、果は因を為して、其国、其民は他の世界の進運にも後れぬやうになるのである。故に流行といふことも是を広義に解釈して来ると、一国文運の進歩発展を促すのみならず、大にしては世界の富を増すといふことにもなる訳なので、聽ては人類の富達上に大貢献を為すものとも言はねばならぬ。(中略)日本人なるものは、其の生れた国の日本の面目だけは存して貰ひたい。潰さない様にして戴きたい。其れ丈けが懇願だ。近頃、兎かく国民性を無くなす流行があるやうだが、そんな『流行』は眞平だ。(傍線引用者)

この発言に従えば、当時の渋柿園は既に流行会に参加していたに

もかかわらず、「三越の店附を覗いた事」もないということになる。ただ、「渋柿園一夕話」での発言と比べれば、流行を創り出す商工業や科学の発達が世界や人類の発展を促すこともあるという理由で三越の存在を肯定するような立場に転換していることが分かる。この微妙な変化は、流行会という組織と渋柿園とのかわりもたらしたものと考えることもできようが、流行を「国民性」を保守するそれとして捉えるところを見れば、旧幕臣としての明治国家に対する認識がもたらしたと考えることもできよう。あるいは、三越や近代の流行を批判しながらも、それらを国民国家の強化装置として是認していく論理が、『太陽』誌上の特集記事「文教と三越呉服店」に集った他の論者たちにも共有されているところを見れば、そうした言説様式を渋柿園もまた吸収したと考えることもできよう。当時の渋柿園は「三越の店附を覗いた事」はまだなかったが、このような認識や論理の中でかつて批判していた三越の流行会に名を連ねることを受け入れていったように推測される。

### 三、〈江戸趣味〉の中の渋柿園

そのような渋柿園のスタンスや意識とは別のレベルで、流行会は渋柿園という存在に価値を置いていたようだ。明治四三年七月九日開催の流行会例会で、次回の例会の講話者として渋柿園を望む票が多かったが、渋柿園の事情のためそれは九月例会に延期され、渋

柿園は九月八日に「幕末に於ける武士の風俗」という講話を行った<sup>28</sup>。好評のため、この講話の続きを望む声も多かった上に、渋柿園は同年一〇月一〇日開催の流行会第一回講演会の演者に選ばれ、「江戸時代の手習師匠」という題目で講演を行ってもいる。三越の機関雑誌『みつこしタイムス』によれば、この講演は「文壇の老將軍」が「老儒の経書を講ずる」ような身ぶりで行われ、聴衆は厳肅な態度でそれを聴いたと伝えられている<sup>29</sup>。会員の希望通り、同年一月八日開催の流行会では、渋柿園の幕末風俗について続きの講話「予が知る刀装の沿革」が行われた他<sup>30</sup>、流行会の場では「食膳を撤したる後、塚原氏は起て幕末時代武家正月風習の面白き講話をせられしには皆耳を傾けたりき」<sup>31</sup>とも伝えられており、渋柿園が会員たちの関心を引き、敬意を持たれるような存在であったことが分かる。

それは、実際に幕末を幕臣として生きた渋柿園のauraがもたらしていたものであったようだ。三越の機関雑誌には、先に紹介した流行会での講話がしばしば掲載されているが、その際の渋柿園の表現にはある共通した特徴が見られるからである。例えば、「嘉永以後、戊辰前後の事になりますと見たり聞いたりでは無くて、自分で以て実験したことが少なく無い。其の実験に因ると大分違つた事もありますので、私は此れから其の実験談。自分の遣つて来た事について申上げたいと考へて居ります」(「江戸時代の手習師匠」『みつこ

『タイムス』明治四三年一月、「小さい鍔を附けた、白柄に塗鯨、朱鞘といふ、／＼怒ういふ装りの人を喜んで指しました。即ち私も指した。そして下緒を極く長いのにした」(幕末の江戸風俗(脇差)『三越』明治四四年三月)といったように、渋柿園の実体験であることが強調されたり、時には刀剣や鍔の実物を紹介しながら話が進められたりしている。<sup>33)</sup> 幕末を武士として生きた渋柿園の実体験が講話の中にちりばめられることで、その信憑性を聞き手に保証するような効果を發揮したのだらう。

三越の機関雑誌には渋柿園の小説も時折掲載されており、例えば、元禄研究会や流行会結成以前に掲載された「子ゆゑ」(『時好』明治三七年五〜七月)では、「然し又た、武人として最も重んずべきものは信義である。下世話にも云ふ武士に『言無し!』、あるいは、『武人の要素は決断にある。彼は今其の決断に頼るより他に為術無き事を、亦た其の決断に由りて断じたのである』といったように、『武人』の一般的な価値観が前提とされた上で、それが作中人物である武士の言動を決定していくような表現が見られる。他に「彫像」(『三越』大正元年八月)や「屏風の画」(同 大正二年一月)といった作品も見られるが、これらも渋柿園という作家そのものが抱えていたイメージと決して無関係に受容されていたわけではないだろう。ちなみに、三越が大正二年八月に行った「懸賞文芸二十種」の募集では、渋柿園は、幸田露伴、森鷗外と共に小説部門の選者を務めてもいる。<sup>34)</sup>

前述したように、渋柿園は流行会から派生した江戸趣味研究会の一員としても活動するようになり、大正元年二月二〇日開催の第一回、大正二年一月三一日開催の第二回と続けて会に出席し、機関雑誌『三越』誌上に掲載された「江戸趣味研究資料」では、第二回の「祭礼、仏会」(『三越』大正二年九月)を担当している。江戸趣味研究会は、この「江戸趣味研究資料」を『三越』誌上に紹介した他、大正四年六月一日から一五日まで三越で開催された江戸趣味展覧会を実質的に主催した。<sup>35)</sup> 江戸趣味展覧会は、尾形光琳の二百年忌辰ともタイアップしながら物品の展示や講演会を行い、開催期間を延長するほどの好評を得た。<sup>36)</sup>

このように三越の流行会や江戸趣味研究会での渋柿園の活動を列挙すると、これらの組織と渋柿園との深い関係がうかがえるかもしれないが、少なくとも流行会にはそれほど積極的に出席しているわけではない。表から分かるように、機関雑誌に毎月のように紹介される流行会の例会出席者の欄に渋柿園の名が度々現れるわけではないのである。ほぼ毎回出席している会員もいる中で、渋柿園の出席状況は決して良いとは言えないのだ。先に取り上げた「渋柿園一夕話」における西園寺公望に対する批判や、三越、白木屋に対する渋柿園の批判をふまえれば、ある個人や組織に批判的ではありながらも、それらにかかわっていった渋柿園のスタンスをそこに読み取ることでもきようし、西園寺公望や三越との関係よりも、単にそこに

表 (塚原法柿園の流行会例会出席状況)

開催年月日	出席状況	開催年月日	出席状況	開催年月日	出席状況
明治42・1・21	○	明治43・1・21		明治44・1・8	
明治42・2・23		明治43・2・23		明治44・2・8	
明治42・3・13	○	明治43・3・18		明治44・3・8	
明治42・4・20		明治43・4・24	?	明治44・4・8	
明治42・5・26		明治43・5・18		明治44・5・8	
明治42・6・25	○	明治43・6・15		明治44・6・?	
明治42・7・18	○	明治43・7・9	○	明治44・7・8	○
明治42・8・26	○	明治43・8・8		明治44・8・8	
明治42・9・20		明治43・9・8	○	明治44・9・8	
明治42・10・25	○	明治43・10・8		明治44・10・8	
明治42・11・25		明治43・11・8	○	明治44・11・8	
?	?	明治43・12・8	○	明治44・12・8	

開催年月日	出席状況	開催年月日	出席状況	開催年月日	出席状況
明治45・1・8		大正2・1・8		大正3・1・9	
明治45・2・8		大正2・2・8		大正3・2・8	
明治45・3・8		大正2・3・?		大正3・3・8	
明治45・4・8	○	大正2・4・8		大正3・4・5	○
明治45・5・8	○	大正2・5・8		大正3・5・8	
明治45・6・8	○	大正2・6・8		大正3・6・?	
明治45・7・14	○	大正2・7・18	○	大正3・7・12	
天皇崩御のため休会		大正2・8・8	○	大正3・8・8	○
大正元・9・8		大正2・9・8		大正3・9・?	
?	?	大正2・10・10		大正3・10・8	
大正元・11・8		大正2・11・9		大正3・11・?	
大正元・12・8		大正2・12・8		大正3・12・8	

開催年月日	出席状況	開催年月日	出席状況	開催年月日	出席状況
大正4・1・1		大正5・1・8		大正6・1・9	
大正4・2・8		大正5・2・?		大正6・2・?	
大正4・3・8		大正5・3・8		大正6・3・8	○
大正4・4・8		大正5・4・?	○	大正6・4・8	
大正4・5・8	○	大正5・5・10	○	大正6・5・8	
?	?	大正5・6・8	○	大正6・6・8	
大正4・7・10		大正5・7・8	○		
大正4・8・8		?	?		
大正4・9・8		大正5・9・8			
大正4・10・8		大正5・10・?			
大正4・11・8		大正5・11・?			
大正4・12・8	○	大正5・12・8			

付記 この表は『三越(みつこし)タイムス』『三越』誌上の流行会関連記事をもとに作成した。  
○は法柿園の例会出席を示し、空欄は例会出席者としては法柿園の名が記載されていないこと  
とを、?は記載そのものが誌上に存在しないことを示す。

集った他の文人たちとの関係を重視した渋柿園という人間の姿を見て取ることもできよう。

ともあれ、明治末期から大正初期の渋柿園が、元禄研究会や流行会、江戸趣味研究会、兩声会、文芸委員会、文芸協会といった数多くの組織に関与していたことは確かだ。三越の流行会を取り上げたこれまでの研究は、各界の著名人を集めたその存在をクローズアップするケースが多いが、一人の参加者に焦点を当ててそれを捉え直すことが見えてくるのである。ただ、渋柿園が関与した多くの組織の中でも、三越が関与した元禄研究会や、三越の内部組織である流行会、江戸趣味研究会には、渋柿園と旧知の間柄にある文人たちや、同じ幕末生まれで同世代の者、旧幕臣の家系という同じ境遇にあった者、江戸文化に造詣の深かった者が一定数を占めており、その中で「江戸趣味」が共有されていた側面はあろう。

葵文会もそうした組織の一つである。葵文会は、近世期の書物を復刊した葵文庫や、大槻如電、饗庭篁村、幸堂得知監修による江戸文化、文学の研究誌『あふひ』を吉川弘文館と連携して刊行していた団体で、『あふひ』誌上には、会員として沼波瓊音、中内蝶二、宮武外骨、高田早苗らの名が、『あふひ』の読者として、坪内逍遙、巖谷小波、関根正直、前田曙山、石井研堂、柳川春葉、小川煙村、幸田露伴、塚越停春、伊原青々園、坂井久良岐らの名が見える。渋

柿園は『あふひ』誌上に「江戸時代の軟文学」(『あふひ』明治四三年七〜九月)を連載した他、明治四三年三月一日に上野不忍境内生池院で開催された葵文会の第一回展覧会に、自身の所有する『武道三国志』(正徳二(一七一二年)年)を出品した。この展覧会の他の出品者には、幸堂得知、林若樹、角田竹冷、饗庭篁村、久保田米斎、伊藤松宇、大野洒竹、小泉宇外、鶯亭金升、大槻如電、田村西男、岡本綺堂、星野麦人らがあり、出品者に加えて戸川残花、水谷不倒、幸田成友、佐々醒雪、宮武外骨、内田魯庵らも来会した<sup>⑧</sup>。雑誌『あふひ』の会員や読者、葵文会第一回展覧会の出品者、来会者には、流行会や江戸趣味研究会、ひいては三越、白木屋、松屋の機関雑誌に寄稿していた文人たちと重複する者が多く、当時の東京の呉服店／百貨店と「江戸趣味」を共有する文人たちとの関係が見て取れる。『あふひ』の第二号(明治四三年六月)、第三号(明治四三年七月)の裏表紙に三越の広告が掲載されているのも、このことと無関係ではないだろう。

大正二年に大屋書房から江戸研究会編『機関大江戸』という書物が刊行されているが、その執筆者も、佐々醒雪、塚原渋柿園、幸堂得知、饗庭篁村、岡野知十、小泉宇外、幸田露伴、伊原青々園、岡本綺堂、樋口二葉、田村西男らであり、やはり呉服店／百貨店やその機関雑誌に何らかの形でかかわっていた文人たちや、葵文会周辺の人物たちと重複している。渋柿園は、この書に「江戸時代の軟文学」

「幕末の江戸芸者」という記述を寄せているが、前者は『あふひ』誌上に連載したものの再録と言って良いほど本文が重なり合っている。江戸研究会という組織の実態は不詳だが、この書物も、世代や出自、環境などの理由から江戸文化に関心を持っていた文人たちの人的ネットワークから生まれたものであろう。

明治維新から四〇年程が経過したために生じた〈江戸〉との物理的な距離や、日露戦争後に加速した消費社会的な状況は、〈江戸〉をノスタルジックに回顧したり、〈江戸〉を〈趣味〉として消費したりするような感性を育んでいくことになる。明治末期から大正初期の元禄研究会や流行会、江戸趣味研究会、葵文会、江戸研究会にかかわった文人たちと、三越などの呉服店／百貨店やその機関雑誌とが結びつくのは、明治末期から大正初期の呉服店が西洋のデパートメントストア的手法を取り入れながら店内改革を進める一方で、江戸との連続性や伝統を売り物にすると同時に、近世期の意匠を再利用する形で近代的な流行をつくり上げようとしていたからでもある。日本近代文学史にしばしば取り上げられるように、同時期にパンの会に集った青年たちがやはり〈江戸〉をロマンティズムの対象とするような感性を持ち合わせていたことも、〈江戸〉との物理的な距離や日露戦争後の状況と通底しているであろうが、概して呉服店／百貨店は、〈江戸趣味〉に浸る前衛的な青年芸術家たちと結びつくことはなかった。江戸との連続性や伝統を売り物にする呉服

店／百貨店は、〈江戸文化〉を経験的に身体化し、それを半ばノスタルジックに回顧する、実績のある旧世代の文人たちに象徴的な価値を置いたからである。塚原洪柿園とはその一人であったのだ。

### おわりに

洪柿園は晩年まで壮健であったが、大正六年七月五日、執筆中に体調を崩し、そのまま死去した。洪柿園存命中の文学史は、やはり明治二〇年代半ばの歴史小説ブームの中に洪柿園の登場を位置づけ、「高山樗牛の『滝口入道』は之に応じて出てし者なりき。其他遅塚麗水村井弦齋塚原洪柿園（後の蓼洲）等の作家は皆此氣運に乗じて世に用ゐられたり。（中略）唯洪柿園の筆力稍望を属するに足る者ありきと雖、麗水弦齋漸次に方向を転じ、歴史小説勃興の氣運遂に去りぬ」岩城準太郎『増補明治文学史』育英舎、明治四二年」と、洪柿園だけを例外的に評価しようとする。「折角翹望された歴史小説も、終に希望を満たされないうで止み、僅に塚原洪柿園の小説だけにその将来の希望をつなぐといふ有様に終つた」と記した田山花袋「明治小説内容發達史」（『早稲田文学社文学普及会講話叢書第一篇』文学普及会、大正三年）の記述も同様の傾向にある。

しかし、洪柿園が没して数年を経た大正末期には、「唯塚原洪柿園のみが、後日の大成を期待されたが、これとても、卓抜した史眼も、詩人としての情熱もなく、唯漫然として、歴史上の風俗と言語と

を臚列するの風があつたところから、勿論、後日も、私等に印象を残すに足るだけの作品を殆ど出さなかつた」(高須梅溪『近代文芸史論』日本評論社出版部、大正一〇年)、「彼には相当の歴史的知識があつて、史上の大勢をもよく知つてゐた上に、好んで英雄の気分、性行を描いて、時にその英雄の俤を髣髴させる位の筆力は見られたが、欧羅巴の歴史小説などを研究して、歴史小説の新意義を自覚しやうとしなかつたので、皮相に墮し、千篇一律に流れて、大成することが出来なかつた」(小島徳弥『明治大正新文学史観』(教文社、大正一四年)と、否定的な評価が見え始める。千葉亀雄『新聞講座』(金星堂、大正一四年)が「わが近代文壇に数の少ない、歴史小説家の中で塚原洪柿の名を記憶して居る若い人々はどれほど有ることか」と述べているように、既にこの時期には洪柿園という存在は忘却されつつあったのだろう。ただし、明治文学を研究对象として捉えた柳田泉『明治の歴史小説研究』(『日本文学講座 第十一卷』新潮社、昭和二年)は、「外的出来事の描写を趣向とする歴史小説としては明治の文壇で洪柿の上を越す作家は一寸ない」と評価し、「洪柿はもと武士であり、従つて武士魂といふものが最後まで残つてゐる」作家と位置づけてはいる。柳田のこうした評価をふまえ、その後も研究者が洪柿園に言及することは多少あったが、現在は、「はじめに」で述べたような状況の中に置かれている。

おそらく今後、読書の対象としてはおろか、文芸評論や文学研

究の対象としても、洪柿園の小説が読まれる可能性はほとんどないであろうが、明治末期から大正初期の〈江戸趣味〉の広がりの中で、一人の旧幕臣が示した身ぶりは、同時期に存在した様々な組織と一人の文人との関係を考える上でも、一つの材料とはなり得る。そして、少なくとも三越の流行会との関係においては、洪柿園は、近代的な意味での流行の創出に積極的に加担するというよりも、他の文人たちとの関係から組織に名を連ね、その場で自身が身体化している江戸文化の知識を提供するようなかかわり方しか示していないと考えることも充分可能なのである。むしろ、流行会は江戸文化に造詣が深い者だけで構成されているわけではないし、組織に対して積極的な姿勢を示した会員も確かに存在するが、そうした文人たちのかかわりの経緯や度合いを考慮しながらこの組織を捉え直す必要がある<sup>11)</sup>。

### 〔注〕

- (1) 「文壇諸名家雅号の由来」(『中学世界』明治四一年一月二〇日) 参照。
- (2) 概してこのパラグラフは、「塚原洪柿園」(『近代文学研究資料叢書 第十七卷』昭和女子大学光葉会、昭和三六年)を参照した。
- (3) 両声会や文芸委員会設置のプロセスについては、和田利夫『明治文芸院始末記』(筑摩書房、平成元年)に詳しい。
- (4) 三瓶達司「塚原洪柿園」(『明治歴史小説論叢』新典社、昭和六二年)、「洪柿園作『天草一揆』」(『東京成徳短期大学紀要』昭和六三年三月)、「洪柿

園における由井正雪像拾遺―キリスト者としての性格造型―(同、平成元年三月) 参照。

(5) 菊池真一『金忠輔』をめぐって―渋柿園、美妙、英治―(『甲南女子大学研究紀要』平成四年三月)、「塚原渋柿園著作一覧表」(『甲南国文』平成七年三月) 参照。

(6) 例えば、初田亨『百貨店の誕生』(三省堂、平成五年)や神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテキスト』(勁草書房、平成六年)、山口昌男『敗者の精神史』(岩波書店、平成七年)など。

(7) 山本武利『新聞記者の誕生』(新曜社、平成二年) 参照。

(8) 塚原渋柿園『桜痴居士』(『太陽』明治四五年六月一日) など。

(9) 大久保利謙『日本近代史学の成立』(吉川弘文館、昭和六三年) 参照。

(10) 渋柿園は『歴史の教訓』(東亜堂書房、大正四年)などで、幕末維新期の自身の経験が様々な意味での教訓となったことを何度も語っている。

(11) 徳田(近松) 秋江『文壇無駄話』(『新潮』明治四四年二月)によれば、もともと兩声会は当時の読売新聞主筆竹越与三郎(三又)の発案によるものであり、その人選を任された秋江の案では、当初渋柿園の名はその中になく、三又の修正によって加えられたという。秋江は、渋柿園を「書き落した」とし、「渋柿氏は当然あつて好い」と述べている。

(12) 「総理大臣閑月記」(『東京朝日新聞』明治四四年一月一日) 参照。

(13) こうした姿勢は、徳田(近松) 秋江『文壇無駄話』によると、当時の他の文人たちにも見られたようだ。

(14) 「文相文士懇話会」(『東京朝日新聞』明治四二年一月二日) 参照。

(15) このパラグラフについては、『株式会社三越100年の記録』(株式会社三越、平成一七年)を参照した。

(16) 「元禄研究会」(『時好』明治三八年八月)、「第一回元禄研究会」(『読売新聞』明治三八年七月二十四日) 参照。

(17) 「第二回元禄研究会」(『読売新聞』明治三八年一月六日) 参照。

(18) 「第三回元禄研究会」(『読売新聞』明治三九年二月五日) 参照。

(19) 「大隈伯爵連合研究会」(『読売新聞』明治三九年六月一八日) 参照。なお、元禄研究会の動向については、国立歴史民俗博物館での共同研究「歴史表象の形成と消費文化」(平成二二～二四年度)における岩淵令治氏の報告「旧幕臣戸川残花と元禄研究会」(平成二二年一月一日) 於国立歴史民俗博物館」を参照した。

(20) 「文芸協会記事」(『早稲田文学』明治三九年三月) 参照。

(21) 『株式会社三越100年の記録』(前掲) 参照。

(22) 神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテキスト』(前掲) 参照。

(23) 浜田四郎『百貨店一夕話』(日本電報通信社、昭和二三年) 参照。

(24) 『早稲田文学』(明治三九年一～三月)を確認すると、文芸協会の発起人には、巖谷小波、伊原青々園、東儀鉄笛、坪井正五郎、水口薇陽といった流行会会員や後に会員になる名が見え、賛助員には三越の日比翁助の名もある。また、発会式で行われた余興の演劇には、三越による衣裳の調製や屏風の貸与があった。文芸協会は、風俗研究を含めた文芸講演や演芸刷新、旧演芸研究などを行うことを目的としているが、三越の流行会、元禄研究会、文芸協会に関与した文人たちに共有されていたのは、こうした広い意味での「文芸」であろう。

(25) 塚原渋柿園「尾崎紅葉」(『中央公論』明治四〇年九月) 参照。

(26) 拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』(世界思想社、平成二〇年) 参照。

(27) 「七月の流行会」(『みつこしタイムス』明治四三年八月) 参照。

(28) 「九月の流行会」(『みつこしタイムス』明治四三年一〇月) 参照。

(29) 「十月の流行会」(『みつこしタイムス』明治四三年一月) 参照。

(30) 「流行会第一回講演会の記」(『みつこしタイムス』明治四三年二月) 参照。

- (31) 「十一月の流行会」(『みつこしタイムス』明治四三年二月) 参照。
- (32) 「四十三年最後の流行会」(『みつこしタイムス』明治四四年一月)
- (33) 例えば、「予が知れる刀装の沿革」(『みつこしタイムス』明治四三年二月) など。
- (34) 「懸賞文芸二十種」(『三越』大正二年九月) 参照。
- (35) 「流行会主催江戸趣味展覧会」(『三越』大正四年六月) 参照。
- (36) 「流行会主催江戸趣味展覧会」(『三越』大正四年七月) 参照。
- (37) 「葵文会第一回展覧会出品目録」(『あふひ』明治四三年五月) 参照。
- (38) 「葵文会の展覧会」(『あふひ』明治四三年五月) 参照。
- (39) この点については、拙著『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』(『前掲』)や、拙稿「流行の発信と〈文学〉——松屋呉服店刊『今様』の文芸欄——」(『国立歴史民俗博物館研究報告』掲載予定)を参照のこと。
- (40) 「四月の流行会」(『三越』大正五年五月)、「弥生の流行会」(同 大正六年四月) 参照。
- (41) 山崎國紀『流行』及び『さへづり』の周辺——『鷗外と〈三越〉の関係』(『森鷗外研究』平成元年二月)は、鷗外と流行会との関係を考察している。
- 〔付記〕 本稿は国立歴史民俗博物館の共同研究「歴史表象の形成と消費文化」(平成二二―二四年度)における報告「流行研究会の文人たち——塚原渋柿園の位置」(平成二三年七月九日 於国立歴史民俗博物館)を論文化したものである。共同研究員の皆様に記してお礼申し上げます。